





松清

洋伊

改

甲改

第一

楠三代壯士

付り 祝言の酒壺入札

印弁の色巻

女文堂

又之巻 目録

高推小痛すなゝい腹さぐる織立

祝言の巻持ちてや

いぬの状うらぬ音

様といんまのらげ

教送書あけ

浜接極の巻口上

中務屋

門 667 巻

明治三六年 九月十一日

第二

色をくれ小袖血汐は深る程の夜更

五結びは盃持差して死を候は押忍あ
死の仲人を殺せ上下蘇や極入に替り
同去付外略の借付し祝言の追服

第三

解官の市所賑か民乃電

さい立の水れを崩て来る款れ中る彼
こと知る身の悪く悔てうくね天の責
百石の米係納る時は同枝を鳴るぬ悦

① 当推小痛より腕探らるる臧立

世間乃人公ういふ言たりて末の多用いあつたわいねり。
縁起花舞にねり。娘の親いお急よりよりき算を
ひすこの親い親より探乃るた縁起とこの。おしすより
吾月れお急なりとけくろい。算の方より俄善法娘の方
うは衣類のうらへ纏絡りやれさあぐと。殿の洋服不
立賣の市所方へねつり。知りよりさかへし。定
夜のみさうら夜の本持算官二所あまうと結て。挑灯
乃粒よりつま。屋形所と糸の結るごとく。お人も足とこ
どめて目とねどろくね。けをれ答は後。お中れ。盛治
御志すんお入てゆ。小娘入。おのゆびとしまはるる。



他人の月夜中れ若原をたつたは。ほろろとけはてありしが。
けつれさうなれ。あつたは。ほろろと。ほろろと。ほろろと。
おのちの夜は。ほろろと。ほろろと。ほろろと。
解をほろ。ほろろと。ほろろと。ほろろと。
後。ほろろと。ほろろと。ほろろと。
まは。ほろろと。ほろろと。ほろろと。
室と。ほろろと。ほろろと。ほろろと。
方へ。ほろろと。ほろろと。ほろろと。
度。ほろろと。ほろろと。ほろろと。
の。ほろろと。ほろろと。ほろろと。
い。ほろろと。ほろろと。ほろろと。
へ。ほろろと。ほろろと。ほろろと。

い。ほろろと。ほろろと。ほろろと。
と。ほろろと。ほろろと。ほろろと。
ら。ほろろと。ほろろと。ほろろと。
し。ほろろと。ほろろと。ほろろと。
つ。ほろろと。ほろろと。ほろろと。
と。ほろろと。ほろろと。ほろろと。
は。ほろろと。ほろろと。ほろろと。
ま。ほろろと。ほろろと。ほろろと。
い。ほろろと。ほろろと。ほろろと。
ま。ほろろと。ほろろと。ほろろと。
い。ほろろと。ほろろと。ほろろと。
ま。ほろろと。ほろろと。ほろろと。

持て嫁礼の如くはなるといひてなりしとて是れは方の如くはなるといひ
しはなればなれなり

(二) 色恋しれぬ袖血汐小條る夜の度友

意趣ある夜の夜に云われは所人あざとに確打て。雲白くまらぬとて
是で物よなまらぬ物なれどもははみしにたはしむるは初よりまでいれり
るは毛よりと物く。折果こいつがなるなり。まきうつくしき物とまきり
仲人利本を操方へたの趣とつらつらなり。白外のももは平にたはりて
看病人中く耳へ入らう。抱く手結とまされぬよさうまらうとては
つのは恨いにしてはる波次とてまよまはし人にて。討たより外にありしは
さうめては波世のわる幸しけし。百と親念にてめらふ。あまらうの世前
さけてあまらうはなるとなる。嫁の粧をなすらう。は母をなすと嫁に
なすらうに力と粧とてまらうとてま嫁のしすいといふとていひま
あはれの親父母あまらうは母を妻子方へたつらう。わらわお果りよいか
み恨をなされまらう。若細のしめてはなめるやうにたはれまらうとて
まらうはかくて嫁礼の如くはなれははは波次といふとて用意。あまらうの
途へ持仲人の親父のまねい。先き抱うてびくく大層なれはなれど
持女布衣裳の如くかぎり。嫁に男あまらうは打並でさめた。一代
一方の英とほら。継子加へのふ代の娘。あまらうのやうなれく。あはれ
つてく。一世の中い今世といふと。いふたをく。嫁の親と念入らる
も。今あの方がなせつとまらうとて。十人か十人あうらう。あまらう
物ぞり。嫁ねちちの如のまらうとてあまらうは持扇の場。まはり。あまらう
で扇とひらげてのぞく。わらうとて。あまらうとて。あまらうとて。あまらうとて
られすと。あまらうとて。あまらうとて。あまらうとて。あまらうとて。あまらうとて
計を言え。後につれは。あまらうとて。あまらうとて。あまらうとて。あまらうとて。あまらうとて。

びいねんをさしあはせ、切腹とせしむ。おのり笑ひたる人、おれに
 のお役に立てずとて申入る。場中のあな中しければ、おれはさうも
 笑ひ、おれは退散せよとばかりいひ、いさよ中を、おれはさうも
 小して、おれはさうもいひ、いさよ中を、おれはさうも
 まは、おれはさうもいひ、いさよ中を、おれはさうも
 立かた、おれはさうもいひ、いさよ中を、おれはさうも
 海を、おれはさうもいひ、いさよ中を、おれはさうも
 船も、おれはさうもいひ、いさよ中を、おれはさうも
 べ、おれはさうもいひ、いさよ中を、おれはさうも
 立の、おれはさうもいひ、いさよ中を、おれはさうも
 也、おれはさうもいひ、いさよ中を、おれはさうも

③ 柳里の市川おてら、おれはさうもいひ、いさよ中を、おれはさうも

海で、さうもいひ、いさよ中を、おれはさうも
 い、おれはさうもいひ、いさよ中を、おれはさうも
 柳里の、おれはさうもいひ、いさよ中を、おれはさうも
 の、おれはさうもいひ、いさよ中を、おれはさうも
 出て、おれはさうもいひ、いさよ中を、おれはさうも
 家、おれはさうもいひ、いさよ中を、おれはさうも
 だけ、おれはさうもいひ、いさよ中を、おれはさうも
 捕、おれはさうもいひ、いさよ中を、おれはさうも
 して、おれはさうもいひ、いさよ中を、おれはさうも
 方、おれはさうもいひ、いさよ中を、おれはさうも
 の、おれはさうもいひ、いさよ中を、おれはさうも



楠正成が子孫は終るをけきた。世の國越あたるゆゑ。世の人知るもの
中けいひるるれ。金く飾るまけり。事にあはぬ。母の楠正儀が妻よ
て懐胎の中けいひるるれ。内を去去。母うちあはれ。越あまぬ。
金く飾平をまて。つる。市井の件は。保好と。我とありけぬ。母死
於よ。及て。正成が孫あつる。とあり。そとありて。一生土民と。杉
果んる。そ念よ。心。幼少より。軍を。服と。まじ。武藝と。極
み。何れん。うて。今けいひるるれ。と。て。根平の地と。さ。あ。信國
の軍士と。ま。ひ。ま。わ。つ。て。天下と。け。く。ん。と。企。一。あ。ん。軍。令。の。ま。を。
大。軍。計。い。も。捨。て。あ。て。せ。害。ふ。乃。よ。死。に。あ。つ。て。楠。が。子。孫。い。あ。つ。
れ。世。に。あ。る。人。は。嘲。せ。し。ん。り。口。惜。く。あ。ひ。只。今。由。縁。と。ゆ。り。を。と。
是。後。の。ゆ。り。は。妻。く。述。て。す。で。い。後。と。ま。ん。と。せ。何。捕。ま。の。由。り。
傳。り。男。ま。か。甲。次。中。と。あ。て。岩。手。ま。じ。ひ。ひ。身。も。い。ま。ま。の。後。は。

す。で。い。の。ま。ま。と。和。本。の。膳。と。ま。ま。の。死。と。と。げ。ん。と。せ。若。余。報。を
あ。つ。り。の。信。忠。あ。つ。ぬ。は。上。公。つ。ら。つ。て。膳。方。を。の。た。げ。り。使。者
と。こ。ま。し。は。士。討。を。と。せん。の。計。略。あ。か。い。は。す。の。使。と。あ。ね。わ。り
か。う。い。ま。膳。と。打。た。と。せん。と。あ。ひ。り。が。若。余。及。國。志。を。が。ん。か。と。
二。を。ま。ま。の。と。あ。つ。も。若。余。運。命。の。企。あ。つ。り。て。を。と。ま。捕。ま。さ
し。の。人。殺。ま。加。ら。れ。ま。す。そ。は。あ。の。中。懐。疑。あ。つ。る。中。は。由。縁。と。大。切
れ。命。と。胸。を。と。す。り。て。懐。疑。と。ま。結。方。へ。入。て。ね。ま。公。使。へ。申。す。
我。方。へ。使。が。と。越。中。を。あ。せん。と。い。わ。れ。急。死。し。せ。い。て。人。を。ん。か
ら。ぬ。病。氣。と。わ。る。そ。と。い。て。あ。つ。し。も。若。余。及。國。志。を。が。ん。か。と。
は。ま。い。ま。今。か。く。一。人。と。あ。つ。て。ば。後。と。い。ひ。あ。つ。り。と。い。懐。疑。の
傳。と。一。命。と。あ。つ。り。は。信。忠。の。あ。つ。は。働。と。公。使。と。あ。つ。り。世。の
人。あ。つ。り。と。い。て。あ。つ。り。と。い。は。い。り。と。い。は。い。り。と。い。は。い。り。と。い。は。い。り。

命をたね念ふ切後の邪なり。いづれにせよ法と
 げらるゝと。又捕らひの首よりとりて並指たり。そのら若柳後
 切ってお果れがかりんす。さば首斬落し。またなりつゝおもては
 庫下知てめらざれば三度わけさせす。これいふあつゝ。みま
 候くと言上り。若柳を成獄門の本にさうされたり。それより
 此國のいふ落り。民屋栄つて惣昌し。上下万葉紙後しける
 こそ目出さけき ▲梅おめりや上まきり

風流字活頼政

一 付 一 度 八 日 の 出 の 家 色 二 日 云 々 初 日 山
 寶 翹 の 威 光 八 黃 金 塔 五 山 吹 の 波

全初五卷

浮世親仁氣

六十の手習色流の字を揚屋の遊ばり
 年この始末二花の咲こ老後の世盛

全初五卷

俊者抗かじ

和書の意のあらわをてんを初とてまう
 略形の紋を付みなるも揚屋を張抗

全初三卷



牛子正月吉日

父字在
 八代末の
 相板

